

井上真理子¹⁾、辻弘美²⁾

1) 富山大学 医学部 公衆衛生学講座
2) 大阪樟蔭女子大学 学芸学部 心理学科

ユーモアの先行研究

- ユーモアは認知、感情、行動(主に笑い表出)などの反応を包括した概念とされる。(Warren & McGraw, 2016)
- ユーモアと創造性の関連性については古くから議論されており、行動や脳波データから背景に共通する存在の確認が進んでいる。(Koestler, 1964; O'Quin, & Derks, 1997; Perchtold-Stefan et al.2020)



ユーモアと認知的柔軟性の関連性については報告されており、年齢・年齢・職業によってもユーモアの高低や側面が異なる。

目的

- ① 自認する性別および文理の違いによって、ユーモアや認知的柔軟性に違いが見られるかを明らかにすること
- ② 文理の違いや認知的柔軟性によって、他者の多義図形解釈に違いが見られるかを明らかにすること

方法

- 分析対象者：521名 (M_{age}=30歳, SD_{age}=13歳)

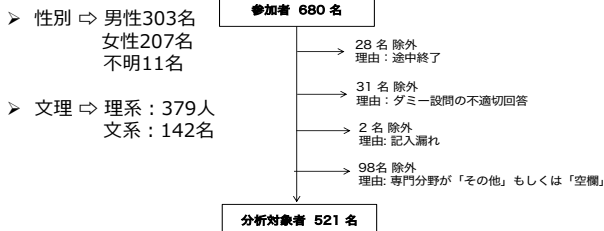


Figure1 対象の絞り込み

●測定方法:

- ユーモア尺度 3因子 (宇恵, 2008)
ユーモア表出意識 4項目 (5件法)
ユーモア表出頻度 4項目 (5件法)
ユーモアへの気づき 4項目 (4件法)
- 認知的柔軟性尺度 12項目 6件法 (Martin et al., 1995)
- 多義図形解釈 (妻と義母)

シナリオ:

「Aさんは、この図を見て少女が見えると言いました。Bさんは、この図を見て老婆が見えると言いました。Cさんは、この図を見てどのように言うでしょうか」

- 選択肢① 「少女が見えるという」
- 選択肢② 「老婆が見えるという」
- 選択肢③ 「きめることはできない」



Figure2 少女と老婆
出典 (W. E. Hill, 1915)

●統計解析:

- ユーモア尺度 (宇恵, 2008)
使用した3因子をもとに因子分析を行ったところ、α係数はそれぞれ、.89, .87, .78であり、同様の結果が確認された。
- 認知的柔軟性 (Martin et al., 1995)
確認的因子分析にてモデル当てはまり度を検討した結果、CFI = .928, TLI = .912, SRMR = .041, RMSEA = .074で1因子構造が確認された。

結果と考察

- 性別および文理の違いによって、認知的柔軟性、ユーモアの表出意識・表出頻度・気づきに差が見られるかを明らかにするために2要因の分散分析を行った。

- 認知的柔軟性 (性別要因のみ主効果)
男性の方が女性よりも認知的柔軟性が高かった。
(F (1,1) = 10.408, p < .01)
- ユーモア表現 (性別のみ主効果)
男性が女性よりも表出頻度が高かった。
(F (1,1) = 3.40, p < .05)

⇒ 先行研究とも一致する結果 (例えば, LaClair M, 2019; 宇恵, 2008)

- 多義図形解釈と認知的柔軟性・文理の関連

Table1 多義図形の回答の内訳 (人)

	少女	老婆	きめることはできない
理系	145	17	217
文系	64	10	68

・ 少女 ⇨ 不正解
・ 老婆 ⇨ 不正解
・ きめることはできない ⇨ 正解

- 多義図形解釈と認知的柔軟性
t検定の結果 ⇨ 有意な差は見られなかった (t (519) = 0.841, p = .40)。
- 多義図形解釈と文理の違い
母比率不等の正確二項検定の結果 ⇨ 有意な傾向がみられ、理系は「きめることができない」と選択する傾向にあることが示唆された。
(χ². (1) = 3.66, P = .06)。

「少女」もしくは「老婆」と回答した割合は半数程度

⇒ 他者の視点を予測する際、自分の視点などの影響を受けている可能性

今後の課題

他者の違いを考える思考スタイルに影響する要因を明らかにすること

本研究は、科研費1 (JP23K02875) およびJST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2145の支援を得た。